

## 金曜四限 哲学Ⅰ

担当教員 植村恒一郎

### 試験概要

七月二十二日に行われる期末試験は全二問。持ち込みは不可。

一問は作文。授業で与えられたテーマに関してあらかじめ構成し、試験時間内にそれを紙面に再構成する。

一問は授業で聞いた言葉を説明する単問形式。10個の小問に分けられている。

# 1 体験の私的性格

体験の私的性格とは、クオリア(感覚質)<sup>1</sup>の違いである。(クオリアとは、対象を認識した際の「感じ」。例えば「りんごの赤い感じ」や「空の青い感じ」の「感じ」といったこと。)<sup>2</sup>

ここで一つ疑問が浮上する。つまり、「A 君が捉えるクオリアと B さんが捉えるクオリアは一致しているか、あるいは一致しうるか。」ということだ。他者のクオリアが「どうであるか」は原理的に調べることができない。それは、クオリアが脳の信号だけではなく「感覚それ自体」を指しているからである。

クオリアが一致しないことで問題は生じないか。  
これは身近な例に還元してみればわかる。

例えば A 君には対象  $\alpha$  が色 a として見える。  
B さんには対象  $\alpha$  が色 b として見える。  
それでも両者は c という色の名前で合意している。<sup>3</sup>  
その具体例は右の通り。



A 君は中央の対象を左のように、B さんは中央の対象を右のように認識しているとする。しかし両者は中央の対象の色を「赤」という色の名前で合意している。

ここからわかることは「自己の体験は決して他者とは共有されない」ということである。だから私たちは他者から体験を言語で習うことができるが、体験が「どのようであるか」を他者から学ぶことは決して無い。

ウィトゲンシュタインの言う「言語が見せる夢」がある。

私たちはみんな言語を駒としたゲームに参加している。つまり上図のような合意が成立しているのだ。そのとき私たちは体験を共有しているという「夢」を見る。それはあくまでも言語によって「思い込み」でしかない。<sup>4</sup>

だから、人間は生まれてから死ぬまで一度たりとも他人と体験を共有することのできない、本性的に孤独な存在であるのだ。

たとえ B さんが A 君のクオリアを認識できたとしても、それは B さんによる「A 君のクオリア」のクオリアであり、A 君のクオリアを把握したことにはならない。<sup>5</sup>

<sup>1</sup> クオリアは身近な概念だが、科学的にはうまく扱えない。これを「クオリア問題」という。

<sup>2</sup> 肉眼でみた色が正しい色と言えるか、という議論がある。例えば、私たちは「空は青い」という「事実」を共有しているが、これは客観的な事実ではなく、「人間には空が青く見える」という事実を言い換えたものにほかならない。ここから、物の客観的性質を言い表すことが出来ないことがわかる。これが知覚と性質の断絶である。知覚から世界の構造をとらえようとすると、必ず破綻をきたす。

<sup>3</sup> 色と形はどちらがより根源的か、という議論があるが、このときは色が形よりも根源的である。なぜならば色があるから形がわかるからである。(私たちが対象の形を周囲の色との違いで区別して、その境界を認識するのである。)

<sup>4</sup> 現実におけるは決して一枚岩のような物ではない。自己と他者との(あるいは他者同士の)知覚経験は比較を絶しているのだ。例えば A 君がリンゴを見たときにそれが「赤い」ものだとする保証はない。そのため、「赤いリンゴが見える」という近く経験は「赤い」という言葉と A 君のクオリアとに分離している。

<sup>5</sup> x を認識対象、写像(関数)A を A 君が x を認識した脳内の像、写像 B を B さんが x を認識のした脳内の像とすれ

## 2 デカルト

### ◎Cogito ergo sum(我思う、故に我あり)

Cogito ergo sum と近代科学には相関関係がある。

著作『省察』から見る。

この著作は、デカルトが六日間にかけて、確固たる学問の基礎を作り上げるためにあらゆるものを疑ってみる(方法的懐疑)を行ったことが記されている著作である。<sup>6</sup>

夢を見る、とは本来ことばの使い方としては正しくない。なぜなら夢とは原理的に、「夢から覚めたとき」にそれまでの体験が夢であったと認識されるからである。

そこでデカルトは考えた。

「夢がそのような性質を持っているのならば、現在が『夢』であると判断できる確実な根拠は無いのではないか。」

つまり、これから今まで現実と「思い込んで」きた物が一瞬にして「夢であった」と醒めてしまわない(夢が外的に破損されない)と判断できる根拠は何も無いということだ。身近なものからあらゆる物は不確かでしかない。

### ◎ 「桶の中の脳」

このような議論を行った哲学者にパトナムという人物がいる。彼は「桶の中の脳」という議論を行ったことで知られる。

例えば、私たちが脳以外の器官をすべて失ってしまったが、医学が進歩しており、脳だけの生存が可能になっていたとしよう。脳は電気信号により感覚を捉えるので、脳にカメラやマイク、あとは味覚を電気信号に変える機械をつなぐ。すると脳はカメラに映った外の世界を認識し、音を聞き、物を味わうことができるのではないか。

---

ば、Bさんが捉えたのは写像  $B(A(x))$  であって、 $A(x)$  を直接に捉えた物ではない。こうした問題は G. Berkeley 『視覚新論』や R. Descartes 『省察』でも触れられる。

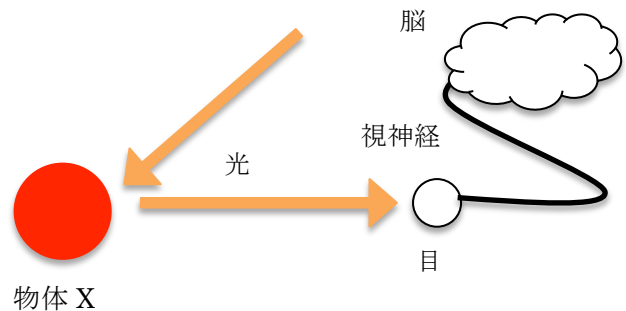
<sup>6</sup> この著作『省察』におさめられている「第一省察」には「一生に一度は、すべてを根底から覆すために疑ってみて(方法的懐疑)、最初の基礎から新たに始めなければならない。」といったような言葉がある。ここにはデカルト自身が多くの偽なるもの、疑わしきものを真として受け入れてきたという、自分の知的な不誠実さへの気付きが読み取れる。ここからデカルトは様々なものを疑い、確固たる真理(デカルトはそれを Cogito=「考える自己」とした)のみを基礎とする哲学を打ち立てる。

ここで語られるのは、「人間は脳さえあればあらゆる体験ができるのではないか。」ということ。これは裏返せば、いかなる体験も人の手によって作り出すことができるので、人間の体験という物すべてが真であると断言することは決してできないのだ。

### ◎ 物が離れて見えるのは何故か？

私たちは物体を認識するとき、自分から「どれだけ離れているか」ということもあわせて認識している。これは、物体とその周囲の環境をともに認識しているから当然である、と考えることができるかもしれない。

そもそも知覚とは、光が物体により反射し、それが目によって捉えられ、視神経を通して脳に伝達されるからである。「見えた」と感ずるのは、目によって捉えられた刺激が脳に伝わって初めておこることであって、それ以前に視覚は生じ得ない。



ここから、視覚は「脳の内部」でおこっている光景であると言えるのだ。

つまり、A 君が物体 X を捉えるときには、物体 X およびその周囲の環境などすべての視覚的認識は脳内の処理によって行われている。身体の外側で視覚的認識は起こりえないのだ。<sup>7</sup>

脳内で認識される対象が離れて見えるのはどうしてだろうか、というのはこういうことに議論の根底がある。

### ◎ Cogito ergo sum 再考

私たちが A を疑うとき、その「疑う」は取り除くことができない。例えば『A は偽である』ということを疑う」というとき、「A は偽である」という志向的内容は必要となるが、それ自体の真偽は必要とならない。つまり取り除くことができる。しかし、「疑う」という行為自体を取り去ることはできない。「疑う」ということ自体を疑うことはできない。<sup>8</sup>これがデカルトの「Cogito ergo sum」である。

例えば「自分が存在しない」と考えるには「自分が存在しない」と考える自分が必要である。<sup>9</sup>

自己存在の根拠は「思う自我」であるが、その「思う自我」は瞬間的存在でしかない。刹那滅<sup>10</sup>的な自我存在である。これはコマ撮りになった時間と同様に不連続な自我存在空間があることになる。

ではなぜ「私」にしか言及しない「Cogito ergo sum」が大きな力を持つのだろうか。ここでは「心」や「私」の記号化が行われているのだ。「私」が記号的に捉えられるということは同時に世界をも記号的に捉えるということである。知覚が、知覚対象が何であるかが分かればよいので、知覚対象が知覚そ

<sup>7</sup> 同様に音なども、経験未然では情報にはならず、身体で捉えられてはじめて情報となる。

<sup>8</sup> 「～が聞こえる」や「～が見える」といった認識も「～が聞こえると思う」、「～が見えると思う」というような I think that～と同様の構造をしている。ここには、考えることには考えることの存在が含まれている。つまり、思考と存在の同一性が見られる。

<sup>9</sup> 原理的に自己矛盾である。

<sup>10</sup> すべての存在が生成した瞬間に消滅すること。その一瞬一瞬がすべて別の物になっているという考え方のことである。

のものに似ている必要は無い、というのがデカルトの議論である。認識対象そのものの差異が、認識の差異となって現れると述べている。

世界全体を記号として捉えるということは、私たちの知覚はその記号の「表現」するところのものであることになる。<sup>11</sup>

デカルト以前には、認識とは「私たちに知覚されるように世界は存在する」と言われたように、私たちの知覚と、外界の知覚対象は似ていると考えられていた。<sup>12</sup>例えばヒュームは、「ある二つの事物が同一であると思うとき、それらは完全に同一のものであるというよりも、むしろよく類似<sup>13</sup>しているものである。」と述べている。<sup>14</sup>しかし、この考えによれば、「観念が事物でないものをあたかも事物であるかのように表象する」ところに生じる質料的虚偽の問題は解決されない。これには、温度感覚を例にとろう。「冷たい」という感覚は「冷たさ」という積極的な感覚があるのではなく、「熱い」という感覚が欠如しているとも考えられる。また片手を温めて、片手を冷やした後と同じ温度の水にそれぞれの手を入れると、左右両手で感じ方は異なる。感覚とはこのように相対的な部分も持つ。つまり、身体と外界が感覚を作り上げているのだ。外界の客観的記述は困難、ないしは不可能である。ここからデカルトは素朴实在論を批判した。これに対してデカルトは、こうした質料的虚偽を避けるために感覚の観念が何かを表現していると主張した。<sup>15</sup>

ここでデカルトの『省察』に収められた「蜜蝋の議論」を見てみよう。

蜜蝋を火に近づけるとドロドロに溶けてしまう。

それ以前の姿とその後の姿をして同じものだとどこで言えるのか。

どちらも記号であり、広がりを持った物体でしかない。

ここで示唆されていることは、「感覚する事は、考える事に他ならない」ということ。感覚の中に思考を内在させてしまったのだ。

そこでデカルトが新たに導入した認識方法を見てみよう。

## ◎ 第六省察

<sup>11</sup> 同様の議論を言語に対して行った言語学者にソシュールがいる。彼が言うには音価の差異があると分かればそれは記号としての役割を担うということ。そのため、言葉を聞いてその指示対象が分かればよいので、言葉そのものが言葉の指示対象に似ている必要はなくなる。(例えば、「赤い」という言葉は赤くない。)これが記号としての言葉である。

<sup>12</sup> このような立場を素朴实在論という。デカルトによる批判の対象となった考え方で、「見えている通りに外界が存在しているといったように、外界が自らの知覚通りに存在している」と認識する立場である。彼らは「似像モデル」によって私たちの知覚を説明する。つまり、Aを見れば、それが表現しているA'が分かり、A'を見ればそれを表現しているAがわかるとうこと。

<sup>13</sup> 似像説を体系的に展開した思想家にルクレティウスがいる。彼は『事物の本性について』で視覚認識を「ものの表面が薄く剥がれて目に飛び込む」ために生じると述べている。これは世界の秩序をそのまま理解しているという意味で、素朴实在論の先駆となっている。これによれば、人間が視覚によって距離、明暗を判断できるのは剥がれた表面が押しってくる空気の量や清濁によっているという。(当時暗さは空気の汚れとして解釈されていた。)これに対する批判は現代科学によっても完全には成し得ない。

<sup>14</sup> 一度視野から離れた物質が再び視野に現れたとき、如何にしてこれらの物質の同一性は保たれるのか、という問題があるが、ヒュームによれば、人間の判断の基準は類似性であるので、人間の判断を加えることでそれらの同一性を脳内で構築しているという。パークリーが「存在するとは知覚されることである」と述べたように、私たちは事物の存在を感覚に頼っているところが大きい。

<sup>15</sup> これがデカルトの言う reality objective=「表現的实在性」である。訳者によってこの翻訳は異なる。

デカルトは第六省察において、心身問題<sup>16</sup>に触れている。

かつて身体は、外界と認識の類似性を保つための無垢な入れ物と考えられていた。しかし、デカルトは自身で生み出した表現的実在性の考え方をもとに考え、その類似性を保つ必要は無いとした。そのため彼は、身体とは物質的一要素と考えた。このとき、人間の身体が機械であっても問題はない。

手や足がないのに、その位置に痛みや刺激を感じる、という問題に対してデカルトは、「身体の各地に神経が張り巡らされて脳に繋がっている。ある箇所に刺激があると脳を感じる。つまり痛みの原因は脳にある。身体の断絶が起こったとき、例えば今は断絶してしまった足につながっていた神経が刺激されると脳はあたかも、今は断絶した足に刺激があったと感じる。」といったように説明している。このようにデカルトは、「感覚の本質は脳にある原因によって表現されたもの」と考えた。感覚する原因があるのは脳だが、感覚される事物は原因が身体の外部にあるように表現されている。この表現システムをデカルトは「心(精神)」と考えた。

赤ん坊にとっては「快」「不快」というのが区別できる感覚<sup>17</sup>である。身体の認識なし、快と不快という認識だけで赤ん坊は世界と関わっている。デカルトはこれが感情＝記号であるという根拠としている。こうした感情の理解＝表現は、「不快」<sup>18</sup>によって有りうるダメージを我々にさけるように促す。

## ◎ 神の存在証明

イマヌエル＝カントによって、神の存在証明は以下の三通りに分類される。

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>1. 目的論的証明</li><li>2. 宇宙論的証明</li><li>3. 存在論的証明</li></ol> |
|---|

1は世界的设计者としての神を、2は世界の第一原因(因果関係の根源)としての神を、3では概念から存在を導くものとしての神が想定されている。デカルトによる証明は3の存在論的証明であると分類されている。

### ・ 目的論的証明

大文字の **Designer** としての神の存在が前提となる。

世界にある物体はある目的のために作られている。世界は **Designer** の箱庭として考えられる。

二つの例を挙げて考えてみよう。

まず一つ目。たくさんの基石を投げる。あるときは乱雑に基石が散らばった。またあるときは基石がハートをかたどった。一定の空間以上に石が散らばらないようにしているとすると、両者ともおこる確率は当然同じはずである。しかし、その前提があるにも関わらず、私たちは後者の状態に意味を見いだ

<sup>16</sup> 哲学における問題の一つで、人間の身体と精神の関係について問うものである。

<sup>17</sup> ラカンは赤ん坊の、自己と分離した身体意識がやがて自己に結合される段階を「鏡像段階」と呼んだ。

<sup>18</sup> 不快な感情は精神と身体が混じり合うことによって生成されると説明された。これは生きるために必要な感覚であり、デカルトはこれを「自然の教え」と述べた。

そうとする。

もう一つ。ある日道を歩いていると、石につまずき、100円玉を溝に落とし、傘を持っていないのに雨に降られた。

どちらも確率的には「十分にあり得ること」であるが、私たちはこうした偶然に **Designer** の存在を疑ってしまう。カントの『判断力批判』には、「美しいものは偶然にはできない。何か設計者がいる」との旨が述べられている。つまり、こうした「奇跡的なもの」の背後に神が存在する、と述べられているのだ。

#### ・ 宇宙論的証明

これは、神の存在を因果関係によって証明しようというものだ。

例えば我々の系譜をたどっていくと、祖先までそれは途切れることはない。つまり、「なぜ存在するか」は因果関係を遡ることで理解できるのだ。<sup>19</sup>

そもそもなぜ「何か」は存在するのか。存在する必要性はどこにあったのか。こうした疑問に神の存在を持ち出すのが宇宙論的証明である。物事を極限にまで押し進めた思考によって生まれたのがこの証明だ。またこの場合、宇宙が神によって創造された「特異点」以前はどうなっていたか、さらには特異点以前、以後に宇宙が創造されていた場合は時間がどうなっていたのか、などという疑問も浮上する。

#### ・ 存在論的証明

アンセルムスの著作、『プロスロギオン』の第二章におさめられた証明が有名である。まずはその証明を見てみよう。<sup>20</sup>

[アンセルムスによる神の存在証明]<sup>21</sup>

神の定義：それより偉大なものが考えられ得ないところのもの。

この「それより偉大なものが考えられ得ないところのもの」という言葉を聞いた者は、その聞いたことを理解する(=intelligit)。そして、彼が理解していることは、彼の理解(する心)のうちにある(=in intellectu)

ところで、この「それより偉大なものが考えられ得ないところのもの」は、理解(する心)の内のみにあるのか、それとも、理解(する心)のうちにあるだけではなく、その外の現実においても(=in re)あるのか、二つのうちどちらかである。

もし前者であれば、それは、理解(する心)の外の存在を書いている分だけ偉大さが少ない者になるか

<sup>19</sup> 旧約聖書などにおいては、神は世界を「無から創造」する。

<sup>20</sup> ガウニロはこれに対して「概念と存在は本来別の物」として言葉から存在は導きだすことは出来ないという反論を行った。

<sup>21</sup> この証明に関して、デカルト、スピノザ、ヘーゲルが賛同したことに対し、カント、ヒュームらが反対した。また、ガウニロという人物がこの証明に対して反論したが、アンセルムスはそれに対する返答も行っている。

ら<sup>22</sup>、それより偉大なものが考えられることになり、「それより偉大なものが考えられ得ないところのもの」と矛盾する。したがって、後者の場合しか残らない。

つまり「それより偉大なものが考えられ得ないところのもの」が、理解(する心)のうちにあることが認められた以上、それは、その定義からして、理解(する心)の内だけにあることはできず、その外に、すなわち現実存在する。つまり、神は現実存在する。

この証明は、人間のこころの働きを利用したものである。「否定の比較級」というテクニックを用いることによって、「無限なもの」を有限の側から捉えることができたのだ。

◎ 外界の存在証明……私の「内」と「外」という区別は自明か。

私たち人間の「内側」はいったいどこにあるのだろうか。皮膚の下側、というのならば、喉から肛門まで続く管は人間の内側か、外側か。また、ミクロレベルで見ると、私たちの体は宇宙線を通すようにスカスカである。私たちの「内」と「外」との関係は決して自明ではないのだ。

それでは私たちの心はいったいどこにあるのか。これは文化によって解釈が異なっている。心を何か質料を持ったものだと考えている文化もあれば、体のどこかに延長なく潜んでいると考えているような文化もある。<sup>23</sup>

### 3 「アキレスと亀」と時間

有名なゼノン<sup>24</sup>のパラドクスについて触れてみよう。以下に挙げるように四つの運動<sup>25</sup>に関するパラドクスがある。

#### 1. 二分割

点 A から点 B に行く間に無限の点を通るが、有限の時間の間にはすべての点を通ることが出来ない。よって点 A から点 B に移動することは出来ず、運動はありえない。

#### 2. アキレスと亀

アキレスが亀よりも後ろから出発し、両者が競争したとする。アキレスが亀のいた地点に到着した時点で亀はアキレスよりも前にいる。またアキレスがその地点にたどり着いた時点で亀はアキレスよりも前にいる。よってアキレスは亀に追いつくことが出来ない。

<sup>22</sup> 神=最高完全者が存在しないことになると、「存在する」という性質を欠くことになり、それは完全ではなくなる、ということ。

<sup>23</sup> 実際、古代から中世にかけて人間の魂は自然の一部、つまり空間的移動を行う質と量を持った物体として理解されていた。

<sup>24</sup> ここで語られているゼノンはエレア派のゼノンであり、ストア派のゼノンとは別の人物である。

<sup>25</sup> 運動に関して、ヘラクレイトスは「物は常に移り変わる。一瞬たりとも止まらず変わり続ける。」と述べている。また存在に関してはパルメニデスが『有るもの』のみが有り、『有らぬもの』は有らぬ。」と述べている。この「有らぬもの」によって「有るもの」は囲まれており、「有るもの」は分割出来ず、運動せず、生成も消滅もしないと述べた。



### 3. 飛ぶ矢

時間を細かく分割して、「現在」の幅を 0 に近づけると、矢は止まっている。時間を現在の寄せ集めだとすると、矢は常に止まっている。

### 4. 競技場のパラドクス

それ以上分割できない時間中に、ある物体が距離 2 を進むとき、その物体が距離 1 進むときそれにあたる時間は存在しない。よって運動はありえない。

このように様々なパラドクスが考えられ、運動の不可能性を主張したのがゼノンである。ここからアキレスと亀のパラドクスについての考察を深めてみよう。

まずはアキレスと亀がなぜ注目されるべきか、ということから説明する。アキレスと亀のパラドクスは「地点」と「時点」というたった二つのタームから運動を説明したもので、ここで「時間」や「時計」は存在していない。速さと時間という概念を導入すること無く二つの運動を比較することが可能だと述べているのである。時間や速度が未定義であるので、アキレスや亀に速度を付与してこのパラドクスを論破するのは不可能である。

速さということが話題になったが、それでは時間の進む速さとはいったいなんなのだろうか。私たちは秒針の進む速さが時間の進む速さだと思い込んでいるところがある。それでは長針や短針の進む速度というのはどうなるのだろうか。またそういった思い込みは一体どこから来るのか。

速さとは、本来アキレスと亀で見たように、二つの運動の比較として現れる、比較的・相対的なものである。そのために直接の比較が必要となる。ところが視覚は、星を非常に小さいものだと思い込ませるように、正しい長さの理解を与えてくれない。

時計はそのような問題を解決してくれる。時計は円運動であるため、直線上の運動理解とは異なり、大きさ・距離によらず視覚による正しく運動を理解できる。<sup>26</sup>

ところで円運動である時計をいかに規定するかということも問題になる。回転による規定を行ったとしても、それは「時計の針が一回転する時間で時計の針が一回転する」という循環的な定義となってしまう。そのため、時計の針というのはすべての基準運動となるものであり、速さは本来的に定義されず、量としての時間を生み出している。<sup>27</sup>

このような時間の定義のもと、運動の比較は「A が X する間に B が Y した。」と記述される。私たちはこの「間」という持続に行き当たるのである。この持続は量を持たず、質的な時間の流れである。

こういった時間という概念は私たちにとって既知的な部分を多く含む。そのためかえって理解が困難になっているのである。「名前が与えられること＝実体があること」と理解している私たちにとって時

<sup>26</sup> 時間が自己比率として与えられるからである。

<sup>27</sup> アリストテレスが『自然論』で述べた運動の捉え方は、「変化」という視点によってである。始まりと終わりの隔たりによって理解されるのが変化による運動である。このように時間も「間」という隔たりによってある始点と終点との隔たりが量としての時間として理解される。

間とは、常に実体があると信じられていた物である。そのため「過去・現在・未来」という時間様相<sup>28</sup>についてもまともな定義が少なく、私たちに本当に理解されているとは言いがたいものである。

## 4 身体と鏡像

### ・ 道具と身体

道具とは身体の延長である。身体が行えないことを身体と協力して行う。そのため人間に似ている必要性は全く無く、寧ろ道具がその作業を行い易いような形に洗練されていく。

それでは道具として扱われるべきロボットが人間に似せられて製造されるのはどういった関心からであろうか。ここには、道具とは全く違った観点が働いている。人間に似せるのは、ロボットに人格を認めようとするからである。道具は本来手段であるべきなので、ロボットをめぐり、人格と手段が対立している。

人格の源泉は、汲み尽くすことの出来ない「他者性」にある。ロボットが人間に近づいたとしてもおそらく人間ほどの魅力を感じ無いただろうと思われる。それはロボットには汲むべき他者性が無いからである。

### ・ 鏡像

「像」とは周囲とは不連続な光景のことを言う。端的に言えば、「枠」で囲まれた光景のことを指している。鏡に映る光景も、一種の像であり、これを「鏡像」と呼ぶ。

私たちは鏡「を」見るのか、鏡「で」見るのか。また鏡は左右が反転するが、左右とはなんだろうか、また鏡の中左右とは一体どうなるのか。

鏡そのものには表と裏があるが、表には鏡像が現れるために私たちは左右を定義する。しかし、本来鏡面は二次元であるので、方向を定めるべきものであろうか。

鏡はそもそも像を見ているのではなく、光線を反射させて自分を見ているものである。<sup>29</sup>つまり、私たちは鏡を見ているのではなく、鏡で私たちの存在を見ているのである。

左右を規定することができるのは自分の身体のみである。それうえ、鏡像に左右を規定するのはそもそも正しいとは言えない。鏡面で方向を規定する際には、自分を軸として他のものの位置関係の中でそれを捉える。例えば、私が私の世界で窓に近い方の手を挙げると、鏡像の私も窓に近い方の手を挙げる。このように、鏡像の方向意識はものとの関係において捉えられるもので、上下左右とは隔絶した概念となっている。

---

<sup>28</sup> この時間様相についてはアウグスティヌスが「時間様相は現在しか存在し得ず、過去は現在の意識の中で蘇ってくる記憶のことで、未来とは予期のことである」という定義を施している。

<sup>29</sup> ここで、鏡像の像的性格が否定されている。

## 5. ジェンダーとセックス

ダーウィンによって進化論が発表されると、目的論的な進化論<sup>30</sup>は否定され、少しでも多くの子孫を残すことができた形質が保存されるという結果論的な進化論が浸透した。そのため、人の進化は性の進化とともにあるということができる。

ここで人間とボノボを比較してみよう。

ボノボのメスは、発情期と偽発情期をもち、交尾可能だとオスに勘違いさせることができる。そのため、一度に多くのオスが一匹のメスに群がることがなく、チンパンジーのようにメスをめぐって攻撃的にならない。こうして仲間内での争いが無く、種の保存に優れた生物となった。

進化論を前提としてもう少し性の歴史と発達について見てみよう。

ネシー&ウィリアムズの著書に『病気はなぜ、あるのか』がある。この著書はヒポクラテス以来の臨床医学とダーウィニズムのもとで主流である進化医学(Darwinian Medicine)とを比較して病気のあり方を捉えている。病気は、ヒポクラテス以来の臨床医学の視点では「異常な状態」であると考えられているのに対して進化医学では、人間は病気にならないように進化することも可能であったであろうが、なぜ病気になるのか、という問いをたてる。そして、病気は身体の防御機能であって身体の異常であるという捉え方は誤りとする。つまり、病気は個々の生存の不可欠なプラスの意味を持っているというのだ。<sup>31</sup>これは人を同性愛にする遺伝子も同様なのではないだろうかと考えられる。

私たちは性に関して「ジェンダー」と「セックス」という区別を持っている。しかし、この区別は決して自明なものではない。また、この区別もジェンダーである。ここから諸哲学者の性に関する思想をみてみよう。

フーコーは「sexe」と「sexualite」<sup>32</sup>という二つの言葉を区別した。Sexualite = 「sexe から発動する諸現象」と定義した。「sexe」は単純に性と訳される。この言葉は近代になるにつれ意味が多様になり重要な言葉となっていく。フーコーは歴史的に見て「sexe」という語の意味が変化し、複合的・総合的概念が生成されたことを明らかにする。

フーコーの sexe の概念は性を開放した点で非常に新しい概念である。歴史的に見れば、性は「管理」の用語で語られる。例えば協会時代には、性の問題は懺悔すべき告解の問題として扱われていた。また時代を経ると神父が村の性の管理を行っていた。その後、様々な sexualite が登場し、sexe の意味が豊かになっていくのだ。

フーコーによると、性の概念は三つの役割を果たすと整理した。まず 1.性は唯一のシニフィアンであ

---

<sup>30</sup> 類人猿から人間へと進化したと考えられていた、人間中心主義的な進化論のことを指す。

<sup>31</sup> 鎌状赤血球性貧血症や統合失調症が発症した場合、子孫を残す率は発症していない個体に比べ極めて低くなる。これらの病気が、遺伝子が原因で発症するのならばなぜこれらの病気の発症率は下がらないのか。それはこの病気が発症しない形態の遺伝子となっているときには人類に対して非常に有益なものとなっているからだとされる。実際鎌状赤血球性貧血症は発症しない形態であるときはマラリアの耐性を作り出す。そのため淘汰されることなく受け継がれ続けてきた。

<sup>32</sup> Sexe は概念的、sexualite は実際的に存在するものと区別できる。後者は sexe という概念によって理解される。

り、普遍的なシニフィエであるものとして機能することができるようになった、ということである。つまり性は本来領域の異なる諸概念を人工的に統一した問題的概念で、普遍的な力を持つものとされて「原因となる原理」を実体化させた。また 2.「sexe」が生物学・医学・精神医学・心理学などの諸科学の対象となり、新しい実在性を支え得たということである。そして 3.本質的な反転の運動を保証した。性的欲望に対する権力の関係の表象を逆転させ、性的欲望を権力に対するその本質的で積極的関わり方においてではなく、権力がなんとか隷属させようとしている、特殊で変更不能な決定機関に根を下ろしたものとして出現させることを可能にした。つまり、実体化された性を、個人を超えた権力によって支配・隷属させようとする動きに出る。<sup>33</sup>本来、私たちが支配する「性」という表象はそれに対応する一元的な「実体」は存在しないが、その転倒した表象におののき、それをコントロールしようと振り回される。しかし、性とは性的欲望の装置の中でもっとも思弁的かつ観念的で、もっとも内面的ですらある要素である。

続いて、バトラーを見てみる。バトラーはフーコーの流れを汲んだ理論を展開する。バトラーはジェンダーを「それ自身が本当は社会的な構築物であるにも関わらず、我々がそれを『自然』であるかのように見えるまで自己を『自然化』したもの」と定義した。こうして同性愛に対する差別的な視点を批判した。どういう事かという、同性愛の性質が本人の意志によらないのであれば、それは「自然」なことではないのか、ということである。また仮に同性愛が不自然であるならば、それと対比されている自然とはいったい何なのか。

そもそも異性愛が「規範」のように扱われているのはどうしてか。それは、同性愛にもやはり男役と女役が存在しているから、と考えられる。だが、絶対的なオリジナルが物質的・現実的に存在するのだろうか。<sup>34</sup>

異性愛は繰り返し行われ、様式化された行為である。これも言葉と同様に全く同じものはありえない。様式化故に認められただけで、異性愛がオリジナリティをもつということは自明ではない。こうして異性愛の脱自然化を説いた。<sup>35</sup>これが「パフォーマンスとしてのジェンダー」である。男らしさや女らしさといったものは、習慣の中で反復されるもので、その表現や実践の中にしか存在しない。つまり、男らしさや女らしさといったものは、時代時代で反復される一定の様式によって特徴付けられるということである。

---

<sup>33</sup> 性に対する権力の抑圧というと、国家権力の発動が一般的に考えられる。21世紀の今日でも同性愛に対する死刑もありうる国家も存在する。フーコーはこれに対して、もっと「ソフトなコントロール」を強調している。

<sup>34</sup> このオリジナル—コピーの関係をめぐりデリダは「署名、出来事、コンテクスト」という論文で署名のオリジナル性に根本的な疑問を投げかけた。この論文によれば、字を書くことそのものがコピー行為であり、絶対的なオリジナルは現実的・物質的に存在しないという。またデリダはパロール(会話)こそ言葉の起源だとするイデオロギーに意義を唱えた。「私が語る言葉は本当に私が語っているのか」という疑問を抱く。現実には口から発せられた音声は毎回異なるが、それらは音から断絶した記号として私たちは認識している。私たちの理解とは違い、まったく同じ言葉というものは世界には存在し得ない。実際のパロールは決して同じではありえないのだ。それを同一視して起源=同一性の反復の仮定とすることは誤りであると述べた。デリダは「反復可能性」ではなく、「反覆可能性」が言語にはあると述べた。

<sup>35</sup> この論拠としてオースティンの言語哲学が論拠となっている。オースティンによれば言語には二つの形態があるという。一つは事実確認型発言(constative utterance)である。これは「この薔薇が赤い」のように、事実を述べる際に用いられる。これは文章に対し真/偽を判定することが可能である。もう一方は行為遂行型発言(performative utterance)で、約束・命令・誓いなどがそれに含まれる。発言そのものが行為であり(例えば yes ということと頷くことのような言葉=行為の側面)、事実を確認する真/偽が存在しない。こうした言葉の側面は一定の習慣の中にある(コンテクストに依存している)。さらに繰り返し多くの人が反復するからこれが(たとえば yes=頷くというように)行為として捉えられるようになる。

こうしてジェンダーを理解すると、コンテキストの中でジェンダーを捉えていることになり、反復されるジェンダー表現それ自身に真／偽や実／虚、オリジナル／コピーという規定は与えることが出来ない。コンテキストによって新しい意味を規定することができる。<sup>36</sup>このように同性愛も異性愛との引用可能性<sup>37</sup>において意味が生まれている。

以上のように、フーコーやバトラーの思想は、生殖のという一面的な視点から「性」を開放し、人間の存在の幅を広げようとしたのである。

---

<sup>36</sup> 同性愛における男役・女役は異性愛のそれらとは異なった文脈に置かれているため、異性愛のそれらとはことなり新しい意味を創造していると考えられている。

<sup>37</sup> デリダの言語観では、文の意味と真理はどういったコンテキストに置かれるかによって変化するという。「引用」はコンテキストにおいて成り立つ。発言の以前と以後には何か別の発言が常にある。すべての文の意味は外部に依存しているという意味では、どの本人の「オリジナル」も「引用性」を免れえないのである。

## 予想問題<sup>38</sup>

次に事項を簡単に説明せよ。

- (a) クオリア
- (b) 「我思う、故に我あり」
- (c) 桶の中の脳
- (d) 似像モデル
- (e) 質料的虚偽
- (f) 表現的実在性
- (g) 心身問題
- (h) 無からの創造
- (i) 存在論的証明
- (j) ゼノンのパラドクス
- (k) 「アキレスと亀のパラドクス」
- (l) 自己比率としての時間
- (m) 時間様相
- (n) 鏡像
- (o) 目的論的進化論
- (p) 進化医学
- (q) 「sexe」
- (r) 「sexualite」
- (s) 「パフォーマンスとしてのジェンダー」
- (t) 事実確認型発言

---

<sup>38</sup> この予想問題はシケプリ作者が適当に言葉を選んで作ったものであるため、当たるとは限りません。当たってもシケプリ作者をせめず、あたらしたらシケプリ作者になにかを奢ってあげるのが妥当ではないだろうか。